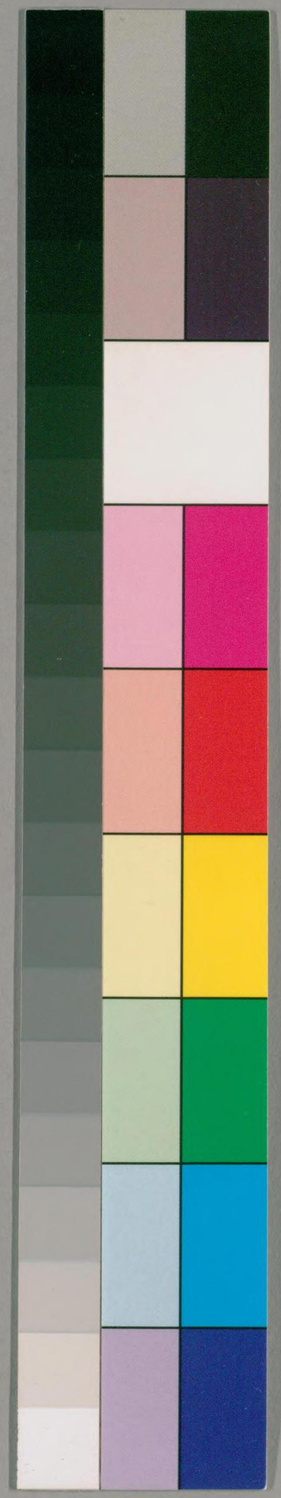
俳諧今者昔之全

863
95



国立国会図書館　タイトル『俳諧今者昔』　請求記号 863-95

ガラス使用

863-95

俳諧今者昔

天明壬寅

備前森々菴　松後述

和露文庫

国立国会図書館　タイトル『俳諧今者昔』　請求記号 863-95

ガラス使用

俳諧伊磨者昔之序

先師帰童仙かけて祖翁の信を傳られて後繞
四世の光あれるに四方の唫客遠よりを見を勞せ
せられたれは境界を幸せして学ふものは牛毛
乃ことくなれども成るものは鱗角よりも反
しくれは遠月に盛むなるに似たる是日
夜に寒ふこれ其の玄妙あしたく至りかたき
なれ無しかけれは是を知る人も若利

に眼くらみ言行のそらいあれは彼羊頭をかけて
狗肉を賣る類いそこに愚瞽を惑はれの
に吉備の岡山なる森に菴のあるしは幼年乃時
庭師に両こえ父祿四老人の志を継ぐ風雅の
信厚く先師乃門に入まりし日より学ぶいと
は次勉ふく倦もあるは旭川の急りに水かを迎て
あるは糸貫の流ちれ閑宮をうかゝ無ましく
都乃交會は少しくにかたりて推敲の修力

とはくさるゝ事なれば三十餘年なるへしけるから
先師生前の弟諸よも我門より此人ありて俳
諧に西國の探題なりとそいふ事ならねども宜なる
なるはゆへに異門の吳風ハ此もあれ是に似たれ
非の為に害あるものを歎き邪路に陸るの輩
とかゝるなりとく隨聞の要旨を記しなる慕ハ
しに師の遺事を拾ひ録して今ハ此りしと号
を永く先師の深意を傳人その德のおもはるる

をも后の世に志しめしけるとかくまゝくこの書
の深切なるもなほさりにしてかしや世上に
かすまへけらんにはたゞく千載の子雲を得る
知しと同志喬交の周ゝに小序を辞せず出雲の
魚坊隣江菴の北窓小筆をとれ于時天明
二年壬寅炎七月日

遺事

先師ハ美濃國本巣郡芝原郷北方の産なり
元録庚申の七月に生れ給ひ氏を田中にして
おされ名を幸治郎と言ひおのことなり高
市良ハとよひ薙髪して東伯とハ申せしか
此名を志らぬ人も海くあるへし遠境の門
人の訪ふまゝ五竹菴とのゝ尋ひてゆけ
ゝ犬うり童も合点せしハ是も徳の餘り成へ

風雅の名ハ東美師のなつけ給ひしまや
初を五竹菴琴左なりしか落髪の後りつたら
五竹坊ゝ称し耳順の年よりこゝろ歸童仙
とも狂し給ふハ深き意のありけるまや又
中ころ五竹を五瓶ゝ書給ひしハおかやけを
はくうり給ひしゆへなりけれは雉を野鶏
ゝよひ玄胡索を延胡索とゝなへし歎ひな
歎へし蕉門四世の宗師たらしハ延享丁卯

の事にして任におはす事をよそ三十餘年末
期に及ひて秘記悉く今の朧菴に傳し安永
九庚子の文月す冬乃六日に没し給ふ北方西運
寺中に葬るとや享年八十一歳
先師ひとくなり篤實恭敬にして體容閑雅なり
しかし又滑稽の趣ありよりて笑言し多人
を和し門人を愛し給ふと子乃如し弱冠
の比ハ醫を学ひて杏林の才を久しうねせ

人の生死に頓る事よりして術を施さず
生質ならず世事に意なしあまひ人の迷ふ
なる財寶声色の二つのみ都て彼六つかん
欲すかけくんを動し給ふ且暮の樂をて俳
諧にして工夫に寐食をも忘れ給ひ几によ
て和漢の書籍くり返しつて俳諧の爲に眼
をけらし又禪味をも弓悟して風雅の奨と
ゆへし給へり扨こそけたりの東蕪師も北方

の来れとも見所ありと常には賞し給ひける
よし其比はいまだ若くおはすゆきに動く
見し人も見られし人もやがて天下の奇才
なりすやがて東蕪師乃没後廣州に随て
発て其の道に宗師と是なり給へ来
月蕪の愁に丸めしめたる哉
とは羅髪の唫ありしかの数く乃愁を捨て
この愁ひとつをとり給ひ神も佛もなきを

いさしよしとはいへ給はさらんや名高き五竹の菴と
いへは石をたてく水を流しにくもる石燈籠の風流
なるへきに其居は北方に市中にせまわく表に竹の
窓あるもの師乃居間にして裏に第ふかる軒客を
やとしの舎なり庭乃松菓はあるにまかせくれの
外の調度もなるに多かれ雅事に用ゆる
市章にへ人乃繒わくなまたありしかと
ちゆゑ給ひしかの渕明う

南聽のありさま兼好かりしれぬまさまく
思ひ合されてそこく行る
先師おもひしは豪飲なりしと座師の規誡
にもとくふ門に酒禁しおふおと三十餘年に
もかり持戒の僧徒とは塑ノ酢般若湯のかえ名
あるに斯くはしゝおふことゆゑにそれ志
かりあらしはるは積聚の愁かれおふ爲り
さく門人のあれちにすゝめしかそ實や月華乃

席に臨てむくはしなるに似たる今宵こと乱に
及ぶ風に遠にしもあらねはとて古希の比より二三
盃乃興を催されし又先師壯年より兼柳中へ
いつ出ふものにはなし哥舞妓は今日の世情を知
ちに便ありとて人の以さるへはアんもし給ふ是も
そこはしくの虚實に在ひおふなるへし
先師性謙遜にして風雅の德つゝ給ふるの如し
禄脚は捨身の行なるに我背積の惱なりとて

なれ矣ゆるすおれはまたいとて高き豪富乃招に
も應し給ひて師命によりて三越行脚乃後を
あらちに伊勢尾張ひしへ駿河にも倫お
を限りて小へへ経歴し給ひす先師もし世計の
為り漂泊を事やし給ひんにへ堯中珠玉を満
ぬやきにはるんさらにおいさす世り俳諧師とく
なる者の集造るとて句料ひさかゝ又忘式
の平母丹青乃肉をいろとるとへ日を同しうして

も諸る事ならすけれや行脚へし給ひしも吾徳を
慕ふ人海内に満たる
先師自の風雅に信あるへけらなり勧懲抑揚して
人を教るに倦ていけらるをうかふ者とは先の勅
そうの意をいさなひ漸すくめる案をへよかく
懲して其心をたもしもてに佳境に入れ乃
親身に到らくも十句に一句も賞し給ひてを面く
如にかなふ句あるはへをく黙しますなく笑給ふ

のこれかしのそのかく笑乃顔せを度くさん
さわしこそ遺憾なれ
師の人を教るその思ひに隨ひ一つならぬ彼れ
ハ句を安らかなれの給ひ又是ハ其工なれども
聞へしの東華州も又かくやあらん先師と鷹
仙とハ筆硯とこそにせしか先師の句ハよれども
質ならさるハ取給ハす仙の句ハあしきをも文な
れハ捨給ハさるもしか先師ハ文に仙ハ質なり

火ハ得る所をおさへて得ける所を揚るなり
色しけれや先師ハ句ことに質をもつとし
給へとも天性乃文にのつら備わるの間こと
有文質彬こ生わとも言ひ川色かわし
の門人それ質を学むく文をもつらん
ハ無那鄲の歩をうしなひて俗中の俗り
墮人その名
師常に門人に對しく翁のかくのこまひしハ

いかなる事にや東美師のかく書給ひし是
解しぬそやなと申されつて門人の疑問我
ゆさなれ信不信を探わ給ひしかをして尋るの
信ある人には其こゝろ水れ流るゝか如くなりし
師曰俳諧ハ執行の信にありて自悟乃機を
俟川亀し信なれ人には千日ハ夜なと説とも
こそ詮なりなへし此実や膝下にありし人也
一生一句の悖をさに知ぬ人も海首也

いまし壬辰の秋なる亀し弔告さく門葉乃俳
諧今の如くなるハ發句ハ徒言と成り附句ハ法
すなわゆれなんかと師旨ハ給ふ盟の年師やめり
此時て男松宇して訊せしに門人乃俳諧すて
其後子か言つゝにちりし欲しかゝらんや我もその
弊をさらんとて發句ハ趣向をしかに附句ハちゝく
附らなり脇の句ハ口ゆとく親しくなすそと示さ
れしよりし實やこそ後ハ間に髪ばいれをしいへん

附句もあまたゆえし
先師進退の謙遜はちらなら俳諧にも又謙遜し
給ふ事も老の到く工夫する事乃あるはねはんの
むふ所をいひはるのミ口とく句を作るすると記も
あらすされと老の工夫の届ぬも又自然なるに
老の僻に媚をかさ○て句のむかしからんよりも
只やすらのわらんにハ世の人徒言と笑ハくつらへ
童部になりてんなの害なからんにハと宣ひし

帰童の号も此こゝ語にやゝ自の名利を捨て道を
重むし給ふんにそいと驚かれむしとわ世を
ひ風雅を楽こし人へくそくし世の名利をハ離
きもすらめ風雅のうへり名利をつすれなむハ
ゆとにありたれるまこそにちく七とせ過て支
此妹又ゆゑし時ハいよく俳諧に謙遜を給ひし
今ハひとすらの老衰に幾句も附合もなしぬを
只吾子の執行を学のミ也此給ひしる俳諧はますく

玄妙の場に至りて理座の味ひ蒔にもなくて
おとる事もゆるに覚しまゝ旬に及ひても十論古今
折の如き暗誦し給ふさる後世を見境にて老耄の淑
法ハいふ所なきや又ひたすらの謙遜のことを得て
我の為にハ高手の厳威をそさけ給ふ事あまた侍
りし是又あらかたき徳なるへしかゝる勢ひ古人
の中を需ふ小多くも聞へ侍らせ
先師老年に及ひ給ひぬるとき蕉門五世乃統絶く

無記人定らす門人よりも誰うれとしぬくすゝめし
人そありとゆうえしか其の妹子に語て宣ハく道統
相承ハ我の大事なりく中く容易此事にあらせ
上ハ三祖の遺命にたゝひ下ハあまた乃門人を惑
はせ道乃興廢なるとの一事にありいとれ未来
かハゆき子のあて歟呉越の恨をかたねたりやも
正風の意通したる人にとれ統をハ授く色々れ
たまへ口中此食をつくりしかの親をあらしも我

乃害あらむ者ハいかく大事とハ任すべきを人
なくハ我小さく続をやしたるわとも后乃君子あら
ハ又無るへし人丸なくなりぬれと歌乃道
おこにあらしやとかの貫之乃書けしを道ハ人
をゆゑく興るの意なるへしさハその窓なれ人ハ
続を傳へて世我国とハさん事ハ身命にかけて
すゐしき物をと和哥の三神俳諧の三祖所
誓てかたくまきり給ひしか終にその人を

ゆらまでしハ国ことに風雅の冥富にも加へ
給へ給ひなり面し
風雅ハ人和のもとなれゆへにや俳諧に是非あ
らそふすひとのんにはかふ事人くの中あり
るなと給ひなりにいこめくこ給ひしされや常に分明
ならぬことの多かりしハ此故なり蒔をまたかれ
意おハちしかれ人の心ハ一般なる物にこそ
先師あると記呼て我句をなすすハ極めて難

まこと風雅のうへに工夫を積むこの四十餘年にはよ
におゐて誰人の問むまでも無下に口をはさむ
ゆしと宣ひしかあくまでも謙遜におはせる人也
仮にもかくやさしはよく胸中のあらはれなり
こそかゝれ明眼の師をしなひ問殘す事のこ
多くして闇路をさとるんはなりこの悲しい我
のこゝろ少しせ免さくハ思ひあらはれなり

遺教

それ俳諧ハ當門の教乃外にあるへからぬ世に
何流ゆ流とおもふ称する者をのく俳諧とハいふ
勉からす俳諧ハ天地開くよりの即このあり義乃
低きせるあまたあらず義乃俳諧の聖にしてこの
道に至れる人なりけれやこそ流を汲む者雀門と
となるもいまだ可なるすとおく人の問むまで
正風乃俳諧すと言んものあそれも邪に對するの
正なれハさ言ハすしもあらはれ天地自然

乃俳諧なれハ造化ありしがえらばるく自
己乃作意を需む色ならすいさうも自己を
用ひされハすれたり物我の痛なく造化ハ己
あして己を造化なりけらすハなと力をもいま
すしく鬼神を感せしむへきやと先師常り
のたまいし
連哥と俳諧に虚實のきらひある事師説乃
槩を言ハく風月の情に實ともいふを連哥と

いひ兼名の姿に虚を扱ふを俳諧といふなり
虚に居て實を行ふへし實に居て虚を行ふ
色ならしとハ白馬経の第一義とのや
等に出合ひたりしこの禁
磯山の桜ゆしるれ浪乃吉
是なとハ濡くも嬉し初しくれ
是等の句ハ連哥乃意なり又俳諧にそなる
うくひしに我も出能やこの禁

いそ山の桜とゆきの沼乃吉
是ハとハ濡るゝと雨よ初河夏
かく虚實の表裏に連俳のワラと都とや意ハ連
奇にして言葉のミ俳諧ならんハ所謂琴乃爪し
て田艸とるのそとへなれ通し
發句ハ一句の埒あるならん事を要とし徹上
徹下とて意を貫くへしなれ言ひて一句乃魂を
しらあしく句作ハ寛にしても餘情あるへし附合

も一句聞へかたくしていとくの次の句をハ附へきや先
師の他にあれといひ出れと言る如き言語らに
又無字無語の多くさも彼魂をしらあかの寛に
彼餘情あらしめむら為にして需て他もるに是
あらす門人ハ志を学ばしく句他のミを真似んにハ
徒に鸚鵡の嘴なるへし先師ある沐耳庭記とかくて
名もしらぬ事にしてしく津の國乃
なにはなくぬ何ぞかけり那

と後の月を詠るを幽齊のおよひ又空月
しまさくと真させ給ふを感して和おハ知らず
俳諧の狩とてもさ言ひそしくハ後の月の詮なれ
無しやうにしきて又蘇子瞻か赤壁賦に

人影在地仰見明月

やといへるを師示されしハそし此句先に月をいひて
のち人影に及ぶ無くハ理にちかくして自然乃
姿をうしなひ句意無下にはなるへしとかく

和に漢に古人を友としく百練千鍛の工夫あり
なり又賤か粉ひきうた舩頭馬士の言ふ所もし
まくも俳諧にそなわるをハなぜ知らずに吟
捨給はさわし

風雅に理と理屈の教を先師ハまた理不理と
を示されたり理不理の境をとらされハ一生俳諧に
らしこれ唯安情の扱いにもとにはきて情より
入きハ理屈となり姿よりハ入れハ理となる事

うのきゝハ一歩千里なりけれや羅もそのゆゑを
戒てる耳をもてく俳諧を聞へからす目をもてく俳
諧を見るへしと句給ひしよし連歌とても理
ハよれまたあらねとも言ての艶なれハゆゑ歩
かゝもありぬへし俳諧を俗談平話なるのゆへに理
をもてまされハ風雅をうしなひ姿情にくらはれ
ハ情をなつかしてる理屈となまる句にかゝし愛句の
引句ハ寒るに及ひ歩

八

百出しくなりとあるをもとらるゝ
いそけと渡しもるのすりから
床のうへりハ白氏文集

又

鉢の実も常ようなれハ鉢のうち
沙ちりしてもかめるゝ子孫
養ひたひとおとすひんもく

又

詰袖を見てくる嫁も世帯別を
綿動進りとりしかれ
抱してちさる垣のゆふかれ

又

土産をまゝ浴参宮の角立
蕪墨粟の手入れぬるゝ咲れ
花布れ手入れぬるゝ咲ひ

右をのく前章に理ありく後章に理れし

よくくつれまゝ見し

附合に二句の味ひの事ハ翁と来庵師に到とく
永しきひしかハ門柴の輩もやゝ其ぬけ出ね
とるまちりし三ヶ化とも三句目の變化にはなく
ハ海ゝ分明なるゝ所ありしハいまゝ時機の到
らされハ明らし今やその餘光とかゝ事ハ我
ハ三句目の變をはとさんと先師にはこと論
ありし

かつくユミの雪れ相傘
誓文りかたて神の所縁日
一尺ばかり棚かゝるまふ
又
織なし毛きぬ機にて節句まへ
おとふあるれハ寝まり俑
泣なも上手に書し奉加帳
又

赤坂と無計のあいか一里かと
組しかれてそ又ねぬし
はかもなんそハけに寝とみたるせ
又
出まゝ来て鞠のよりかゝ着てこれ
元服してもまゝ前なみ
堪忍かこゝ絡の花とさしなとく
又

偽授といふハ誰かとのことと
暗気旨いなら、ほ、ハ戻し
ちりふれるかなるハなけれと

又

柏手うしく誌願兼新
世代志のふ編笠をしと下ゝ重き
牽頭の偽こそしてくしん
右の證句六句ハ六躰なる事を考へし

俳諧の修行地ハ盡る事なるへし足もうと思ふ
心のもしは早く不足ハ生しさるへしなれ
とや佛を魔心とく如く戒給るよし我ハ句に
疑を起さるもハ得ますれ難し翁すら自ら
やまんし給ハとや句をなしたる門人に判ハ也
又遠経ある真さを給ふ句をあまるなるよし
先師ある時の夜語に曰もハ句に及ぶ浮世思
望ちらはしそし不死の薬あらハ今三十年

ひくわかく俳諧を執行(シユキヤウ)あらやとをひれ中
されしか
みを萩(ハキ)のもの向ふかける賠(セン)乃家
こゝ是ハ先師志立(シリウ)のころ其先考(センカウ)にひれ給ひし
其の魂祭(タマ)の唫(キン)なるの古希(コキ)ふあまりて手向に
絶(カナ)しとも来し給へり又風鈴(フウレイ)り
吉信(ナトツレ)ハこの物にあらあさ此様
也書くを来とも給ひしされを手経てこの物に

先行と来し給ふ是(コレウ)ハ先師の所に少しかなり
かとまへ給ふかとの絶章(セツシヤウ)にもあらねと一句もなれ
ありなし給はる風雅の信乃厚(アツキ)とも見るへし
又諸言微中(シンケンビチウ)なるとも味ふ無し
俳諧ハ姿の先に情の後なる事十論の教なるの姿(シ)
中(チウ)に情あらハなる也情中に姿なるしもやとく
咲も匂ひにかへハそこに梅のも
と先師ふつゝ唫し給ハ色(イロ)こそ見えれ欲(ウタ)とし

て教示ありし咲もなき其情の白はさん白はて
なと其花乃姿みさらむ姿より情は生し情より
姿とあらはて姿情はなれかたしくなんされや
先師より彼情中に姿ある句をあまたはしかり
未練の輩乃姿情にくらくして世乃俗諧なる
情におかはるくを考後に各事にふれつ歎息
し給ふあるち院にて
この鐘にあるなれはなるの雰も晴む

とは情にとかはるくを破るへき戒なりけれは
情を霧のことくんの月ぬいしり隠さくらまよ
くしはにのるもあしぬ方にはさよふ後鐘に迷ひの
罵されて廿年の禁に還ることなりへしおそれて
色なれ怨るへきは情になりしの弊なる偏きとや
風雅に變化の道理ある事途に轍はとそうてく
上のしるへ下り上へと轉しゆく也途轍になりしむ
色りしすをとへは世にしやり紋の大きなるはちさく

なわ小よハやうく大きかるの誰かハ初め誰かなるく
めじ是をて天地自然の變化にしたく仮にも自己を
もて需じへし事其變化を造化ぬ共にもるハ宗
師の任なわ文道をハ質を補ハ質餘わあれハ文
を助き世の流弊をすくひく人ハ教ゆる事以来
代しきるわ是まで風雅のうへのみなしむや三
代の治も礼樂ハ同しかしをとを此變化に復ゆく
人ハ柱に膠するれをめしにひるへしすてに先師

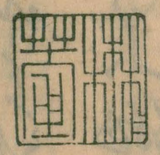
の一生すを今いふ變化なれにしもあらず門人
眼を少くめらく看るへし
先師常に能諧ハ平生一般なわと教給ひしか
ある人難すらくハ實に道ハ兼をしるなる
なりしやと師こゝへて曰虚實ハ十論に散在すれ
といへども一生説とも盡ゆらず今問ふる所の實
ハいふも其實を虚めしく虚といふも實なる
事虚實の虚実に變化をれハ虚に對してれ

實實に對しての虚にしたく虚なれば実なく
実なれば亦虚をなし虚實はもとのゝ
こゝ物の拂排風雅のうへ乃誘なれば天地の
自然底に至るは何ものの虚實の取捨あら
んはしと平生一般とは言ふ事ゆゑ古へより実
遊ばは兼なく花遊れば實なしと歌仙達も
其代々の拂排ありし我が俳諧りは
艶詞なく俗談平話にそれなりしは虚中

に實あり實中に虚なりてはこれ執中の法
ともいふとうや示されしは今いふ俳諧の平生
は儒にも恒の心と教へ佛にも平生心と説ける
今日の拙に俗情にもあらず出ありしこ迷ふ
迄からすれば彼十論にも雅俗のけりを見
ましいふものあまた所に示されしとや我家に
筆をとれる半俳諧は虚實のあつかひを要
として平生一般なるへはいはな事

家とろかなる業をして師の遺事記さんとて選ぶ
徳を書かれば似たれ事わいかにて百つひとつを巻ひ
まゝ隨ゆの説に書くも師の意にかなひしんことを
恐れて多くはもしぬ記性達筆のうち事わ拙
をあさけりて姉さい編集あらんまくはりとよわの
形いなわひそかに丑ふこの集をそれ集とせるの
鉤なりゆゑ

鷦鷯松後謹誌



歌仙行

山里や杖りしも絶しあれの春　先師

枚のしはしまとれて雪面　松後

る盟へ月毛の駒を新見せて　度江

奉公ふりをかめらるくなり　李川

染てまく絶ぬのもまて一おりて　僧芦舟

ここも都といふやうな代や　素大坊

眠れと乳師ともなふ夜まさり　雲行坊
不孝の罪を俺らもかくるを　機因
産神乃甚なさらくのあらはれて　巴卜
出用かはのゝ冥ひてもなし　蕙山
澌くと素聖て入江のいりめくり　十朋
千ノ年殖てを書るものよハ　其友
内諚乃ワけを質産ようなけれ　逸川
男雨さりのはまをと青雲　貞柯

祈禱も廻向まを御経宗　此由
かゝる詞から苣のもひこれ　雅興
咲神し花のうち枝のめつりしく　孤松
帰洛の春をこころ古ひ　芦川
咲氣てを楽しくくれるおもひ人　梅十
くもりうれなる空の癖なる　其緑
といらくと車のきしぬ車は　鬼拉
とさしまゝ歌をすきつひのきね　八十吉

孫さぞもの髮かゆう覚えられ　起六

一ぬぶ吹てなりし鶴ゆる　子峩

夢害（ヤウカヒ）のけしをはしき摩耶（マヤ）の城　朝伍

大工の書ハ賛（タキ）おしのを話　角花

いさゝかゝりんとく同志の告（ツケ）ゝ書　自撲

すゝ六月そ同志くうゝ　知泉

けし登る月ハきらくしく也　孤蘭

柿（カキ）益人を猿（サル）みして並く　女　梅君

初老（ニウ）ゝもなれハ浮世の味（アチ）とりく　〃　桃李

細（アミ）しき色へ屋敷花乃借（トモ）　〃　菊波

貸傘（カシカサ）のさるし柿（ソロ）へく出まりり　〃　巴香

語かあとまゝく佛事ゝ語　〃　佳紅

さるけしや今ハ此しの蕪ゝ為　水之

も聞くあそふ一すしの花　松宇

寛ゝ山里の遺詠とりく巻のくしめゝ並くるすほど
なる程ゝ似たれとゝいふし其の孫小子ふたゝひ師の病
とゝかひ

きるがしたく賜わり筆の法なれはなりまとりて注
てつきれはけるそも常なき風に帝く若の波あくに
さまかれ庭に花くさをちれぬまに谷のうらにさんん
車にしや沼なりなしなるんに法なるなりしかれく
見もせよりしなきやすしをとやはなにおりひなら
なとさるものにはなてへきやうくめてたくみてそん
まんぬをとく我をひらはに面て記念となり男
して然はれにけれやそのことに糸きんし世をも
一物に物し大揮毫の系をなしけみかく
韵を続く長く

海乃幸ねとそ来しぬ

たゝ波洲し筆月のことをれ　蜂の雪　桜渡

春

よくみんれは蕨むさく　恒ね　春

老ましきさへのこまひめの毛　李川

まもゆふまおそふまくの姫蝶小　僧芦舟

松の春はうふ聞さにしき沸し　子載

そしなむく熊はおしぬ梅小　言緑

傘をすれりや門り飛ふ胡蝶　貞柯

ゆくのものはいそぬゆふ見る　女巴雪

二十九

紙類のいづれにそ出位の都　山田
あたらしき日と知るまゝりの鶴の花　鬼拉
人不知而不慍不亦君子乎
沙汰なしに咲く那佛の白ひかな　五雀傍

夏

まいかれは年月の夏より海情の
先後を論ずるとて
年まさく深しさなして柳かな　庭斎
さいらくと世をとらいくしら春子のむ　孤松

咲ぬ日也ぬらぬりも新しき此菓　女菓後
筆の休まなりけや又月晴　芦川
夕立や龍出そうな池の魚　十朋
白鷺の羽をのすくやうの峯　白撲
ひらひらし衣ひらへもあはさ哉　尼知多
一都や二日の月にてまくらん　濱波羅浮
あれ申く夏の中より蟬鳴声　仝素丈傍
行町やまたれはいるほ春　仝市行傍

秋

けしきはせまさへ秋もあさの風　西芝坊
既ほや山も揃さきに向ひ酒　元人 諫四
以ほよいや園にはくれて飛ぶ鶴　紀六
あきもまあきへと菌の蒼（ツボミ）う菌　女 佳和
月まきもけてや里の牛向ふ　蕪也
詩の園（イ）の地も落さぬ一をかゝ　雅奥
志ばらくハやめてもゆくし小春祐　蕪也

木はくよれ簾（ハシ）ちさしあれの雲　元人 京津坊
今しかそこ畸（シギ）うへくみるや秋の雲　伊波 機周
風さはくおや家ちよ戸乃雲　蕪鶴

冬

くれ雪や雪に掃さる砂の上　雪花
風や木兎（ミヽツク）ハ何知ぬしかり　梅十
雪もいそれ人を以ぬくや冬の月　巴卜
肩（カタ）ぬよに呆張ハ見えて秀子哉　女 梅者

なし黒ぬるまれなにくハ乃れ　女桃李
流しけふちゝへもなしにさくか　三夜
一日をさまれく常まさく市の雪　鈴鹿
おすらの雪ふかりしや望の山　遠川
兎角(トカク)して誠にしなりぬ夕時雨　松後
雪の骨馬(ホネ)に跳(ケ)しおくかまに戒　魚場

名所七句

赤石に実まし

まゝ雪(カニ)月のゆふるもなの新こ　毎和場
旅人の目やうるまさく須戸のむ　度江
牛間にあつく同ひなり語(サガ)嫌のむ　孤葉
ほとくにたいさ一都ハ廊り橋　水之
おくしさや挟(セハイ)ひ所を無るゆき　六夕八十吉

此句ハあれの嚴しさへをしてくるりなる
時隠戸の巴門まさく寄ひ出給りし

住の江や小貝に雨ふる　松葉　松宇
そのうち生り元世ゆふ関(セキ)乃小姓(サヨキスタ)佑　松後

佑松宇

集輯ぬ容めりく標題の趣を聞ふかの今昔
物語り效るもをさし温故知新よりとたくるに
亦とまく童部なしの俊語を擬するに
家君獣樣やしきの對白ッ何れも俳諧家に
あらく和漢ともにして又ハ猿か鳴きん古を不
嘆人や指を折まく試りいたらし先師よりくれき

くの門人多あれと恩ハ身ひとつのやうに
おもひめぐらして世乃務のいとまかなくくもの衷
りけへ端しお今ハおもひやり思ひ忍ひんや
又先師の山里の一章ハ記念しとおもひし篋の
後よりお今をまふりて慕ふらんや先師
まはくハまた三とせ姑くふ過ぎるに遺
老の俳諧ハとを記すらしも今ハ昔と
歎くらんやはれおや我もくいかとりくの

国立国会図書館　タイトル『俳諧今者昔』　請求記号 863-95
ガラス使用

863
95

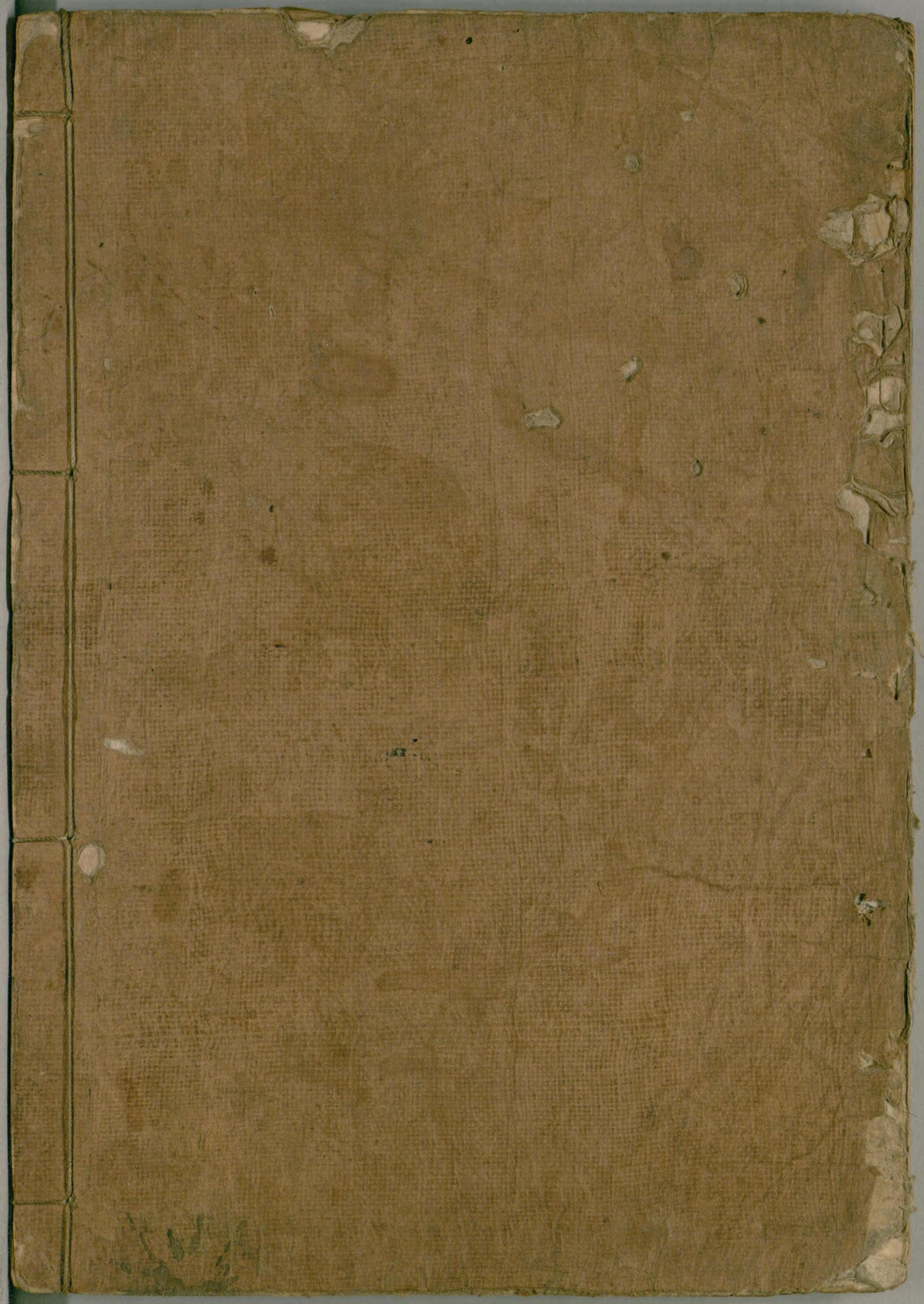
14161

人ハ笑ひ色てゝめと亦蓼くふ虫の好く
まよふハ今ぞ思ひしと弄ひてくせうし
くと代ふを經るとも此集の名ハ云えし
と思ふ所侍坐しく此説をきくひそれに
誌く後乃序と須

京都書肆

七町通二條下ル所
橘屋治兵衛梓

国立国会図書館　タイトル『俳諧今者昔』　請求記号 863-95
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『俳諧今者昔』 請求記号 863-95

ガラス使用